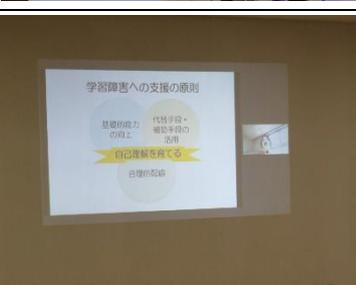


特別支援教育 理論研修会 終了報告

テーマ	学習障がい・発達性ディスレクシアの指導と支援について	
日時	令和 3年 8月 10日(火)	
会場	石狩教育研修センター	
講師	関 あゆみ 氏 北海道大学大学院教育学研究院 准教授 (学習神経心理学)	
参加者	約 60 名	
研修会 の 様子		参加者は、ことばの教室担当者だけでなく、半数以上が特別支援学級の担任の先生方でした。「自分の担当している児童に、発達性ディスレクシアではないかと思われる児童がいるので、理解を深めたいと思い参加した。」「自分の受け持っている読み書きが苦手な児童の指導法について知りたい。」など、どの方もとても意欲的でした。
		最初は、発達性ディスレクシアの定義や特徴、読字のメカニズムとディスレクシアの病態などについての説明でした。とても専門的な内容でしたが、ディスレクシアの読みの特徴、書きの特徴、複合的な困難について知ることができました。それと同時に、先生の説明を聞きながら、ディスレクシアかもしれない児童の顔がたくさん思い浮かびました。
		会場は感染症予防対策のため、3つの会場に分かれて行いました。2つの会場は zoom でつなぎ、オンラインで研修を行いました。 読み能力の発達過程と発達性ディスレクシアの原因について、診断手順やスクリーニング検査を知ることができました。特に、小学生でのひらがな、カタカナの読み書き支援は早く取り組むのが大事だと強調されていました。
		ディスレクシアのある子どもへの支援については、二段階式ひらがな音読指導法や音読指導アプリ、サイコロを使った練習法など、どれも実践してみたいものばかりでした。短時間でも毎日やるのが大切だそうです。RTIモデルによる指導と組み合わせてT式音読支援を行うことで、読字困難児への早期介入ができると同時に、全児童の読み書きレベルの底上げや通常学級の授業改善にもつながっていくそうです。
		ディスレクシアのある子どもへの合理的配慮について、目的を変えず支援をすることが大事であり、学級内や試験・評価における配慮についての具体的な説明がありました。子ども自身が早期から支援を受けることで、支援・配慮があれば自分はいまうまくなるといった経験を積み重ね、自己理解を育てることも大切だそうです。指導を通して「学び方を教えてあげる」のが大切だとお話しされていたのが印象的でした。